

「提携大学とのカリキュラム連携」

プロジェクト報告

草 本 晶

はじめに

ドイツ語・ドイツ文化専攻では、平成24年度麗澤大学特別研究助成を得て、ドイツの提携校イエーナ大学とのカリキュラム連携のためのプロジェクトを実施した。その目的は、留学する学生にとってより効果的な学びを提供するための基盤づくりである。

麗澤大学は、毎年12～20名の学生を半年から1年間イエーナ大学で学ばせている。その人数の多さゆえ、イエーナでは麗大生用の特別クラスを設けており、そのためにも教育上の協力態勢をとる必要がある。特に、留学前後の移行期において学生の学習形態や内容などに大きなギャップが生じないように、日本とドイツの間をうまくつなげられるとよい。

イエーナ大学とは、すでに25年以上の提携関係があり、これまでも授業内容や学生サポートの面において、幾度も打ち合わせを行い、連絡を取り合ってきた。ここでもう一度カリキュラムの連携を確認しておくのは、様々な事情によりここ数年来、両大学それぞれで授業の方法を変えてきていることとも関連している。

まずは、現状把握のため、双方で授業見学を実施した。本稿では、そこで得た知見をもとに、今後の協力態勢においてどのような点に留意すべきか確認しておきたい。

プロジェクトの概要

このプロジェクトでは、麗澤大学とイエーナ大学のカリキュラム連携を図るという目的に照らして、2012年秋から2013年春にかけて教員による相互の授業見学と意見交換を行なった。特に見学では、授業内容や授業形態と並んで、教室の設備や学生たちの授業態度も合わせて確認することができた。見学を実施したクラスは以下の通りである：

Christel Bettermann, Rainer Bettermann（麗澤大学にて）

■ 2012年11月21日、「ドイツ語会話 IIB」

対象：ドイツ語・ドイツ文化専攻1年生、担当教員：Holger Schütterle、

テーマ：「時間」、授業形態：グループ作業（メンバーの交替あり）

草本 晶（イエーナ大学にて）

■ 2013年2月6日、「„Deutsche Gegenwartssprache（現代ドイツ語）“、

対象：ドイツ語専攻クラス＋英独プログラム¹、担当教員：Christel Bettermann、

テーマ：「今学期扱ったテーマの復習」²、授業形態：グループ作業

■ 2013年2月7日、「„Alltagskommunikation（日常のコミュニケーション）“、

¹ 2012年度冬学期のドイツ語専攻クラスは、ドイツ語・ドイツ文化専攻の2年生9名から成る。英独プログラムは、英語コミュニケーション専攻の2年生1名と英語・英米文化専攻の2年生4名である。科目によって、別々に行なう授業と合同で行なう授業がある。

² 授業見学が行なわれたのが学期の最終週であったため、どの時間も主として試験準備のための復習であった。

対象：ドイツ語専攻クラス＋英独プログラム、担当教員：Antje Hasegawa、

テーマ：「今学期扱ったテーマの復習」、授業形態：ペア作業、全体

■ 2013年2月8日、„English language and culture“、

対象：ドイツ語専攻クラス、担当教員：Bonnie Broughton、

テーマ：「期末テスト前復習」、授業形態：全体

* 以上の3つの授業に加え、„Deutsche Aussprache (ドイツ音声学)“の担当教員 Beate Lex にも直接話を聞くことができた。³

それぞれの授業見学に引き続いて、情報および意見交換を行なった。そこではまず、学期中に扱うテーマについて今後も相互で確認することが決められた。さらにイエーナのドイツ語コースに関する運営上の問題点や、個々の学生の様子について聞くことができた。

授業で扱うテーマ

今回カリキュラム連携という点で、特に確認が必要となったのは、学期中に扱うテーマである。麗澤でもイエーナでも、ここ1、2年の間に特定の教科書を使用しない形の授業（いわゆるタスク型授業⁴）に移行してきている。そのために、学生がどのようなテーマについて学んできたのか、わかりづらくなってきている。ここでは、昨年度の実績と今年度の予定を組み合わせ、

³ ドイツ語の発音トレーニングは、コミュニケーション能力の面からも非常に重要であり、学生の関心が高い分野にも関わらず、麗澤では十分に取り組むことができていないのが現状である。担当者の好意により、トレーニング方法についての具体的なアドバイスや教材を分けてもらうことができた。

⁴ タスク型の授業は、プロジェクト型授業とも呼ばれ、ある一つのタスク（課題）を達成するなかで目標言語を使用し、学ぶ方法である。グループやペアで協力して作業することが多く、発見型、自律型、創造型の授業である。このスタイルの授業に移行した主な理由には、必要に応じて扱うテーマを自由に選択できることや、これまで以上に学生の自主性を促進できることなどがある。

授業で扱うテーマ⁵の流れがおおよそどのようになるか、見ておく。（現時点では、3年次以降は詳細未定。）

1年次1学期（麗澤にて）：

「私（アイデンティティ：人物、趣味、性格、好み）」、「お気に入りの物」、
「私がいる場所（ふるさと、大学、好きな場所）」

1年次2学期（麗澤にて）：

「時間（時間の使い方、自分の日常）」、「感情」、「家族と友人（自分の家族、いろいろな家族のかたち）」、「将来の夢」、「食生活」

2年次1学期（麗澤にて）：

「大人になるということ（親との関係、親からの自立）」、「高校と大学の間（日独比較）」、「大学生活」

2年次2学期（イエーナにて）：

「自由時間」、「メディアとその利用法」、「ドイツの音楽」、「休暇、旅行と天候」、「時間の表現、スケジュールと一日の流れ」、「健康と病気 - 病院にて」、「ドイツと日本の家族」、「ホテル - 珍しいホテル」、「イエーナ」

現在は互いに情報を提供する段階であり、特にテーマの重複や補足についての擦り合わせは行っていない。今後話し合いを重ねて行く中で、修正が加えられる可能性もあるが、基本的にはテーマを決定する裁量権は互いにそのまま残し、まずは透明性を確保することが重要であると認識している。

⁵ 「授業で扱うテーマ」とは、語学の授業で扱われるテーマを指す。麗澤では演習科目「ドイツ語総合」と「ドイツ語会話」がこれにあたり、イエーナでは主に „Deutsche Gegenwartssprache（現代ドイツ語）“ と „Alltagskommunikation（日常のコミュニケーション）“ がこれに相当する。

日本人学生が抱える不安

ところで、授業内容と直接の関連はないが、授業見学において気になった点の一つとして、日本人学生が抱える不安をあげておきたい。ドイツに渡り、見知らぬ人と関わらなければいけなかったり、異質な環境で生じるさまざまな問題に対処するなかで自信を深め、授業でも積極的に発言したり自主的に行動できるようになったりする学生がいる一方で、萎縮したままなかなか自信が持てずにいる学生もいる。今回イェーナで見学した授業では、何人かの学生は、わからないことや自分の発言はとにかく辞書で確認してからでないと、安心して次に動き出せないように見えた。その時間には、教育実習生が4名もいて、質問しようと思えばいくらでもできる状況にあったにも関わらず、である。

恵まれた環境にあってもそれをうまく利用できないのは、失敗を恐れる心理が働くためと考えられる。日本でも、授業中にクラスメートの前で発言することが苦手という学生は少なくない。可能であれば、留学に出発する前に、彼らの不安を少しでも和らげ、失敗は成功のもとということに気づいてもらいたい。タスク型の授業を利用して、教員が学生の自主的な発言（間違いも含め）を意識的に促すことで、ある程度の改善が見込めるかもしれない。この点に関しては、さらなる分析と検証を待ちたい。

展望

今後さらに練る必要があるのは、麗澤における留学後のカリキュラムと全体の目標設定である。

留学から戻ってきた学生たちは、ある程度基礎的な語学能力を身につけているが、それをさらに伸ばすには、何をすべきか。また、より専門的な教養教育へ、彼らの体験や関心をどのように結びつけて行くのか。これらの点については、これまで十分な議論が行なわれておらず、漠然としている。

それとも関連するが、4年間にわたって学生は何に到達すべきなのかとい

う目標についても、詰めて行く必要がある。語学能力のレベルや身につけるべき教養の範囲とともに、卒業時における学生のコンピテンシーについても話し合いを重ね、学内のみならず、イエーナとも認識を共有できるとよいだろう。

カリキュラムの連携という点においては、今後も麗澤とイエーナで定期的に打ち合せを行なうことで、情報やアイデアを共有することが重要である。この先数年後には、新しい授業形態による4年間のカリキュラムも一巡する。それに対する評価ができるようになるだろうし、あらたな課題も見つかるだろう。そのつど協力して問題解決にあたれるよう、この信頼関係を維持したい。

今回のプロジェクトではまず、麗澤のドイツ語・ドイツ文化専攻のカリキュラムとイエーナのドイツ語コースの連携に焦点を合わせた。今後はさらに、イエーナで実施している英独プログラムやタイ・プーケットにおけるドイツ語留学、留学先でのインターンシップなどの位置づけも確認していくことで、世界的な視野を盛り込んだ麗澤独自のカリキュラムが形成されていくはずである。同時に、留学をしない学生には何が提供できるのか、同じ外国語学部他専攻とどのように連携が取れるか考える必要もあるだろう。

今回の授業見学は、カリキュラム構築のための第一歩であり、今後も継続的にプロジェクトを進めて行きたい。最後になったが、見学を快く承諾してくれた両大学の先生方に、この場を借りて感謝を表したい。

Projektbericht: „Zusammenarbeit im Unterrichtsplan mit der Friedrich-Schiller-Universität Jena“

Akira Kusamoto

Einleitung

Mithilfe der „Forschungsbeihilfe der Reitaku Universität 2012“ führte das Institut für Germanistik ein Projekt für die Zusammenarbeit zwischen der Reitaku Universität und der Friedrich-Schiller-Universität Jena durch. Das Ziel des Projekts war, eine gemeinsame Basis für ein effizienteres Programm für die japanischen Studenten zu finden.

Von der Reitaku Universität fahren jedes Jahr durchschnittlich 12 bis 20 Studierende nach Jena. Dort studieren sie für ein halbes oder ein ganzes Jahr Deutsch und die deutsche Kultur. Da die Studentenzahl relativ groß ist, wird eine Sonderklasse für die Reitaku Studenten gebildet, was eine enge Zusammenarbeit zwischen Reitaku und Jena erfordert. Besonders in den Übergangszeiten vor und nach dem Auslandssemester ist es wichtig, dass die Studenten keinen großen Unterschied in Lernformen oder -inhalten erleben. Das heißt, diese sollten gut miteinander verbunden werden.

Mit der Friedrich-Schiller-Universität Jena genießt Reitaku mehr als 25 Jahre Partnerschaft. Während dieser Zeit gab es häufig die Möglichkeit der

Zusammenarbeit bezüglich Unterricht und Betreuung der Studenten. Den erneuten Absprachen zum Unterrichtsplan zu diesem Zeitpunkt liegen Änderungen der Unterrichtsmethoden sowohl an der Reitaku als auch in Jena zu Grunde.

Ein erster Schritt zur Erfassung der aktuellen Unterrichtssituation war die Einführung von Unterrichtshospitationen. In diesem Artikel möchte ich aus den Erkenntnissen der Hospitationen wichtige Punkte für die zukünftige Zusammenarbeit herausarbeiten.

Projektverlauf

Mit dem Ziel, die Unterrichtspläne besser miteinander zu verbinden, wurden vom Herbst 2012 bis zum Frühling 2013 an beiden Universitäten Klassen besucht und Kommentare ausgetauscht. Bei den gegenseitigen Besuchen wurden nicht nur der Unterrichtsinhalt und Unterrichtsformen, sondern auch die Ausstattung der Klassenzimmer und das Verhalten der Studenten beobachtet. Die Hospitationen wurden in den folgenden Klassen durchgeführt:

Christel Bettermann, Rainer Bettermann (an der Reitaku)

- 21.11.2012, „Deutsche Kommunikation IIB“
für Fachstudenten 1. Jahrgangs. Dozent: Holger Schütterle
Thema: „Zeit“, Unterrichtsform: Gruppenarbeit (mit Wechseln)

Akira Kusamoto (in Jena)

- 06.02.2013, „Deutsche Gegenwartssprache“
für DaF- und DaF/Anglistik-Programm.⁶ Dozentin: Christel Bettermann

⁶ Das DaF-Programm im Wintersemester 2012/13 besteht aus 9 Fachstudenten im 4. Semester, das DaF/Anglistik-Programm besteht aus 5 Englischstudenten im 4. Semester. Je nach dem Fach werden sie zusammen oder getrennt unterrichtet.

Thema: „Wiederholung der im Semester behandelten Themen“,⁷

Unterrichtsform: Gruppenarbeit

■ 07.02.2013, „Alltagskommunikation“

für DaF- und DaF/Anglistik-Programm. Dozentin: Antje Hasegawa

Thema: „Wiederholung der im Semester behandelten Themen“,

Unterrichtsform: Partnerarbeit, im Plenum

■ 08.02.2013, „English language and culture“

für das DaF-Programm. Dozentin: Bonnie Broughton

Thema: „Wiederholung der im Semester behandelten Themen“,

Unterrichtsform: im Plenum

* Außer der drei Unterrichtsklassen durfte ich ein Gespräch mit der Phonetiklehrerin Beate Lex führen.⁸

Nach den Hospitationen folgten Besprechungen zum Beobachteten. Einigkeit bestand darüber, die im Semester behandelten Themen aufzulisten und gegenseitig auszutauschen. Außerdem wurden über die Fragen bei der Durchführung der Kurse und über die einzelnen Studenten gesprochen.

Themen im Unterricht

Um den Unterrichtsplan zwischen Reitaku und Jena besser zu verbinden, ist es vor allem wichtig, die Themen pro Semester nochmals anzuschauen. Sowohl an der Reitaku als auch in Jena wird inzwischen kein kurstragendes Lehrbuch mehr verwendet, sondern mehr projekt- od. handlungsorientierten

⁷ Da die Hospitationen in der letzten Semesterwoche stattfand, wurde intensiv auf die Prüfung vorbereitet.

⁸ Obwohl die Phonetik eine große Rolle bei der Kommunikation spielt, und die Studierenden daran sehr interessiert sind, haben wir an der Reitaku nicht genügend Zeit und Rahmen, dies zu trainieren. Bei dem Gespräch bekam ich gute Tipps für effiziente Trainingsmethoden und Materialien für Phonetikübungen.

Unterricht geführt.⁹ Das macht es jetzt allerdings schwierig zu wissen, welche Themen schon behandelt wurden. Unten folgt eine Liste von Themen, die schon letztes Jahr im Unterricht besprochen wurden, und die auch in diesem Jahr vorgesehen sind.¹⁰ (Im Moment sind die Themen ab dem 5. Semester noch nicht konkret festgelegt.)

1. Semester (an der Reitaku):

„Ich (Identität: Zu meiner Person, Hobby, Charakter, Vorlieben)“,
„Dinge (Meine Lieblingsdinge)“, „Orte und Räume (Heimat, Universität,
Lieblingsorte)“

2. Semester (an der Reitaku):

„Zeit (Zeitverwendung, Tagesrhythmus)“, „Emotionen“, „Familie und
Freunde (Meine Familie, Familienformen)“, „Zukunft“, „Essen und
Trinken (Essgewohnheiten, Lebensmittel)“

3. Semester (an der Reitaku):

„Erwachsenwerden (Beziehung zu den Eltern, Ablösung von den
Eltern)“, „Zwischen Abitur und Studium“, „Studium und
Studentenleben“

4. Semester (in Jena):

„Freizeit“, „Medien und ihre Nutzung“, „Deutsche Musik“, „Urlaub,

⁹ Handlungsorientierter Unterricht besteht darin, eine Aufgabe zu erledigen und dabei die Zielsprache zu benutzen. Es wird viel in Gruppen oder mit Partnern gearbeitet, und es geht mehr um „Entdecken“, „Selbstständigkeit“ und „Kreativsein“. Die Gründe, warum wir diese Methode einführen wollten, sind z. B., dass wir die Themen je nach Bedarf frei auswählen können oder dass die Selbstständigkeit der Studenten mehr gefördert wird.

¹⁰ Die Themen, die hier aufgelistet sind, werden in den Sprachkursen behandelt. Das betrifft an der Reitaku „Doitsugo Sogo (Deutsch Allgemein)“ und „Doitsugo Kaiwa (Deutsche Kommunikation)“, und in Jena vor allem „Deutsche Gegenwartssprache“ und „Alltagskommunikation“.

Reisen und Wetter“, „Zeitangaben, Termine und Tagesablauf“, „Gesundheit und Krankheit – Beim Arzt“, „Familie in Deutschland und Japan“, „Im Hotel – Kuriose Hotels“, „Jena“

Zur Zeit werden die Informationen dazu ausgetauscht. Eine genauere Abstimmung der Unterrichtsinhalte steht noch aus. Die Auswahl der Themen soll aber weiter vor Ort getroffen werden, denn die Absicht ist nicht Kontrolle, sondern Transparenz.

Angst der japanischen Studenten

Einen Punkt, der mir bei der Hospitation in Jena auffiel, finde ich noch erwähnenswert, auch wenn er nicht direkt mit den Unterrichtsthemen zusammenhängt. Nämlich die Angst, von der einige der japanischen Studenten nicht loszukommen scheinen. Manche japanischen Studenten gewinnen in Deutschland Selbstvertrauen, wahrscheinlich durch die Interaktion mit Fremden und durch die Überwindung der Schwierigkeiten, die in einer fremden Umgebung zwangsläufig entstehen. Solche Studenten wirken im Unterricht aktiv mit und können sich selbstständig verhalten. Es gibt jedoch auch Studenten, die eher unsicher erscheinen und sehr wenig Selbstsicherheit gewinnen. Besonders auffällig war, dass einige Studenten fast die ganze Zeit an ihren Wörterbüchern „hingen“, obwohl im Klassenzimmer außer den Lehrkräften noch vier Praktikanten anwesend waren, also eine ideale Situation, um das Gelernte auszuprobieren. Jedoch waren die Studenten nicht in der Lage, dies auszunutzen.

Möglicherweise ist die Angst vor Fehlern groß. Auch im Unterricht in Japan haben viele Studenten Angst, vor den anderen etwas auszusprechen. Es ist wichtig, dass diese Angst vermindert wird, bevor das Auslandssemester beginnt, und dass die Studenten begreifen, dass Fehler produktiv sein können.

Wir als Lehrkräfte können das vielleicht erreichen, indem wir uns mithilfe der handlungsorientierten Unterrichtsmethode verstärkt darauf konzentrieren, die Studenten mehr zu spontanen Aussagen (Fehler inclusive) zu motivieren. Näheres zu diesem Punkt muss wohl auf weitere Recherche und Überprüfung warten.

Aussichten

Nun, wo die Situation in der ersten Hälfte des Studiums klar ist, sollte weiter an dem Studienplan nach der Rückkehr aus Deutschland und der Zielsetzung des ganzen Studiums an der Reitaku gearbeitet werden.

Studenten, die aus Deutschland zurückkommen, verfügen mehr oder weniger über die Grundkenntnisse der deutschen Sprache. Wie sie sich in Japan weiterentwickeln können, und wie wir ihnen helfen können, oder aber auch, wie wir ihre Erfahrungen und Interessen zu tieferem Germanistikstudium führen können, ist noch nicht gründlich diskutiert worden.

In diesem Zusammenhang ist es auch wichtig, dass die Zielsetzung des gesamten Studiums genauer ausformuliert wird. Zum Beispiel, wie hoch das Sprachniveau der Studenten am Ende sein sollte, welches Wissen erwünscht ist oder welche Handlungskompetenzen (u. a. Sozialkompetenz und Selbstkompetenz) sie bis dahin erworben haben sollten. Solche Richtlinien wären nicht nur für Reitaku sondern sicherlich auch für Jena interessant.

Für die zukünftige Zusammenarbeit zwischen Reitaku und Jena im Unterrichtsplan ist es nötig, durch regelmäßige Treffen die Informationen und Ideen zu teilen. In einigen Jahren wird die erste Runde des neuen Studienplans geschlossen sein. Danach können wir die Ergebnisse überprüfen und auswerten. Um gemeinsam die aufkommenden Fragen lösen zu können, ist es wichtig, das Vertrauensverhältnis mit Jena aufrecht zu erhalten.

Bei diesem Projekt haben wir uns auf den Unterrichtsplan für die

Deutschkurse an der Reitaku und in Jena konzentriert. In Zukunft wäre es interessant, auch den Status des DaF/Anglistik-Programms, des Austauschprogramms in Phuket (Thailand) oder der Praktika in den jeweiligen Standorten nochmals zu definieren. So würde ein Studienplan mit weltweiter Perspektive zustandekommen, der der Reitaku eigen ist. Gleichzeitig ist zu überlegen, was den Studenten angeboten werden kann, die nicht ins Ausland fahren, oder ob eine Zusammenarbeit mit anderen Fachrichtungen in der Fakultät möglich ist.

Diese erste Unterrichtsbesichtigung war der erste Schritt zur Gestaltung eines neuen Unterrichtsplans, und wir haben vor, das Projekt weiterzuführen. Nicht zuletzt sind hier die Kolleginnen und Kollegen zu bedanken, die der Hospitation bereitwillig zustimmten.